

## ROSEリポジトリいばらき（茨城大学学術情報リポジトリ）

Title	学校給食の現状と課題：今日抱えている問題と今日的意義としての「楽しい給食」について
Author(s)	大谷, 尚子
Citation	教育研究所紀要(25): 113-120
Issue Date	1993
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10109/8497">http://hdl.handle.net/10109/8497</a>
Rights	

このリポジトリに収録されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作権者に帰属します。引用、転載、複製等される場合は、著作権法を遵守してください。

お問合せ先

茨城大学学術企画部学術情報課（図書館） 情報支援係  
<http://www.lib.ibaraki.ac.jp/toiawase/toiawase.html>

## 学校給食の現状と課題

### — 今日抱えている問題と今日的意義としての「楽しい給食」について —

大谷尚子\*

#### I はじめに

今年(1992年)ほど、学校給食がマスコミを賑わしたことはなかろう。その話題の発端は、文部省通達ではなく、某町(埼玉県S町)の町長の発言からであった。町長の「給食廃止発言」(1992.6)に対して、住民はすぐに反対の署名活動を起こしたので、給食騒動として新聞やTV等で連日報じられた。

町長の発議の背景には、豪華な町庁舎を建てたことによる緊迫財政を抱え、教育予算軽減のむくろみがあったという。しかし動機はどうか、住民の真剣な論議を誘い、住民の6割の反対署名を集めたということは、地方政治への住民参加をなしたということになり、大きな成果にもなった。

ちなみに毎日新聞が行った世論調査(1992.9)でも給食廃止に反対という意見は61%であり、S町の反対署名者率とほぼ同じであった。このことから、「給食は社会に定着し、父母は行政側の義務」と思っていると解説された<sup>1)</sup>。発議した町長の突然の病死などでS町の給食騒動ひいては全国的な給食論議もようやく収まってきた。今回の給食騒動は、給食の存続か廃止かという論争が中心であり、そのことに終始した感があるが、給食に関しては種々の問題がまだ残されている。

そこで本研究は、今日の学校給食が抱える問題点をあげるとともに、給食に対する今日的意義を求め、それに向けて解決すべき課題について考察したい。

#### II 今日の学校給食が抱えている諸問題

##### 1. 『給食廃止』論争と業者委託化への動き

今回のS町の給食騒動に由来して、国民の間で論議されたことを整理すると、次のようになる。

- (1) 子どもの「食」は家庭の責任範囲のものであり、昼食も各家庭の責任において用意すべきである、用意したい。
- (2) 今日の家庭・家族の中には、毎日子どもの昼食を責任もって用意できないような厳しい状況もあるので、子どもの健康を守るためには学校で給食を用意し、皆が同じものを食べた方がよい。
- (3) 各家庭で作る弁当は、持ち運びの便や腐敗防止に関する問題、あるいは保冷・保温の欠点を持つ。子どもの健康的な成長のためには、学校で出来立ての給食を食べさせたい。
- (4) 子どもの食事を画一化しようとすることに問題を感じる。弁当であれ給食であれ、いずれかの方法に統一するのではなく、各家庭の方針が尊重され、しかもその日その日で選択されてよい。

\* 茨城大学教育学部教育保健講座

理論としては欧米のように<sup>2)</sup>、前述の(4)が理想的に見える。既にこのようなスタイルをとって「弁当併用・メニュー選択性」をとりいれた地域があり、先のS町町長は「給食廃止宣言」の前にその種の学校を視察したという。しかし現実には、理想とは離れた形で、業者委託やセンター化が推進され新たな問題(例えば、「仕出し弁当」の仕入れ)が表出している<sup>3)</sup>。

一般に、作ってから食べるまでの時間と距離が長い場合に弁当が作られる。運搬と食中毒への配慮が一層必要になるので、弁当風の献立(汁気のあるもの排除、揚げ物偏重など)と味付け(甘さや塩分が濃いめ)になりがちである。このような食事内容は成人病のリスクファクターに該当する。『学校給食』は、本来家庭から持参する弁当より味付けが薄く、献立もバラエティーに富ませることが出来る利点を持つ。それにも関わらず、近年増加の傾向が見られるセンター方式(共同調理場)の給食は、仕出し弁当と同様、遠隔地で作って届けるということから、「弁当」的な内容になってしまう。学校給食に期待することは、保護者が作る「弁当」よりも豊かな献立で安全・衛生面で安心できるものである。そのことを前提にすると、期待される給食は、センター方式や業者委託では応えられず、「直営自校方式」の給食となろう。近年とみに、各校の栄養士や調理員がパート化される傾向が増え、業者委託式やセンター方式に変更されていく傾向がみられることは、期待に逆行する現象であり、重大な問題と思われる。

## 2. 教育活動としての学校給食

本来、食べるという行為は個人的な営みであり、家庭に属する事柄として学校が関与しないという国が多いなかで、わが国では「教育」として子ども達の食べるという行為に対して、ある程度強制的に枠を設けているという特徴をもつ<sup>4)</sup>。今年度は「学校給食指導の手引き」が改正され(1992.7)<sup>5)</sup>、教育活動としての学校給食の役割がここでも強調されている。

「給食」は果たして「教育」的な営みになっているかと問い直してみると、種々の問題があげられる。学校全体の時間的余裕と人的余裕がないために、給食の時間に学校給食の目標である「正しい理解」に導くような系統的な指導はもちろん、随時の指導も難しい状況にある。そしてさらに加えて、(こちらの方が影響が大きいと思われることであるが)教師が言葉を用いて「指導」することによらない「教育」、すなわち、学校給食に出される献立・内容・出され方・その時間の過ごし方等々、さまざまな子どもを取り巻く条件と体験が、かえってマイナス効果をあげているのではないかと懸念される。例えば、献立(お子様ランチのような)、アルファ化米・化学調味料・リジン・臭素酸カリウム・亜硝酸塩(各種の添加剤を選別できずに食べさせられる)、プラスチック食器(有害な化学物質、陶器や木製の食器が理想的)、先割れスプーン(箸の持ち方までおかしくする、犬食い)、嗜好(敗戦が伝統的な食生活を一転させた)および給食時間(わずかに22分)などである<sup>6)</sup>。

## Ⅲ 今日の意義としての「楽しい給食」について

前項で述べたように、学校給食については期待されることが多い分、現状は問題点も種々みられる。ここでは、子どもの心身が健全に成長するためには、「楽しい」と感じ受け止められる「とき」をいっぱい体験させることではないかと思われるので、学校給食の楽しさ<sup>7)</sup>について、某小学校対象のアンケート調査結果をもとに考察してみたい。

## 1. 調査対象と方法

- 1) 対象:東京都内にあるS区立T小学校の児童全員を対象とする。T小学校の学区は都内でも有数の高級住宅地を配しているが、一方、都内ではめずらしく農地も散在しているという閑静な場所にある。T小学校は帰国子女受け入れ校であるために、近隣の学校よりは海外生活を積んだ児童が在籍し、海外生活を紹介する教育活動が展開されているが、「学校給食」に関する事項をとりあげたことはない。給食は自校式であり、940人の食事を6人の調理員が作っている。本年度から栄養士が常勤職員から非常勤職員に変わった。回答者の内訳は表1の通りである。

表1 回答者の内訳(子どもの学年と性別)と回答率

学 年		1年	2年	3年	4年	5年	6年	計
性 別	男	45	58	41	44	41	33	262
	女	50	67	47	50	50	47	311
合計(回収率)		95 (79)	125 (81)	88 (57)	94 (63)	91 (62)	80 (50)	573 (65)

- 2) 方法:T小学校のPTA活動の一環として全保護者に調査協力を依頼した。質問紙は学級担任から児童・保護者に配布し、逆の経路で回収した。質問紙への回答は「お子さんと一緒に話し合って回答してください」と指示した。これにより低学年の意向も把握できる。高学年の回収率が低かったが、その背景には、学校からのお便りの回答は兄弟のうちの低年齢の子どものみでよいという慣例があったためと思われる。なお、学級担任経由で回答用紙の回収を行なったことで提出しにくいとした保護者は、直接調査関係者に届けた者も若干みられた。調査の期日は1992年6月1・2日である。

## 2. 調査結果と考察

- 1) 給食の時間を楽しんでいるか?

表2は、「お子さんは給食の時間(ご家庭での食事の時間)を楽しんでいますか?」の質問結果を併記したものである。給食の場合も家庭の食事に対しても、5割前後の子どもが「いつも楽しい」と回答している。「楽しくない」の回答率は5%前後となる。筆者らが茨城の小学校で行った調査(4-6年生対象)の結果もほぼ同じ52.5%であった<sup>8)</sup>。

表2 食事の時間を楽しんでいるか

(n = 573)

	給食	家庭の食事
いつも楽しい	55.8%	48.5%
楽しい時の方が多い	39.8	45.4
楽しくない時の方が多い	3.5	5.1
いつも楽しくない	0.9	0.2

表3は、一人ひとりの子どもの給食に対する回答と家庭の食事に対する回答をつきあわせてみた結果である。表中□で囲んだものは、給食に対する評価が家庭の食事に対する評価のランクと同じものである。合計すると回答者の54.9%を占め、約半分が給食の楽しさの程度は家庭の楽しさと同じということになる。そのうちでも特に「いつも楽しい」と回答した子どもが最も多く、全体の1/3を占めた。その反対にいずれの食事でも「楽しくない時の方が多い」と『食』そのもの

に楽しさを見いだせないとする者が0.7%と数は少ないがみられた。

一方、給食に対する楽しさの評価が家庭の食事と異なっていたのは、回答者全体の43.8%であった。楽しさ程度が「給食>家庭」である者は25.1%であり、反対に「給食<家庭」は18.7%であった。

以上のことより、学校全体でみた場合、子ども達は学校での給食も家庭での食事もほぼ同じような楽しさであるようだが、どちらかといえば、若干給食の方が「楽しさ」をより多く感じていると言える。

調査の回収・分析をしている際に、保護者(母親)から「家庭の食事は楽しいと思ってくれると思ったのに、そう言われなかった。意外だった。」とか『『楽しい?』と何度か聞き直したら、『楽しい』と子どもが答えた』というような家庭での回答風景を紹介してくれた。本調査の回答が、家庭の団楽を提供するという意味もあって、親子の会話をしながら回答されているので、「親の圧力」を感じながら回答した子どもは家庭の食事に対する評価は若干甘くなっているかもしれない。そのことを勘案すれば、一層給食の楽しさが浮き上がってくる。

なお、本調査は「食」について質問したものであるが、謝名元による「家は楽しいか、学校は楽しいか」という登校拒否の気分の有無を聞いている調査結果<sup>9)</sup>に重なる部分が認められた(家・学校双方とも楽しい子どもがほぼ5割いるが、家・学校の一方を拒否していても他の一方で救われている子が3割いる。「家は楽しくない。学校へ行く気がしない」という居場所がない子どもが9%であった。)

次に、楽しさの評価を学年別に比較してみると、図1の通りとなる。1年生と4年生が群を抜いて、家庭の食事と給食の両方ともに「いつも楽しい」とする率が高率であった。そして逆に6

表3 給食と家庭の食事に対する受け止め方の相互関連

(n = 573)

家庭	給食		
	いつも楽しい	楽しい時の方が多い	楽しくない(いつも&多い)
いつも楽しい	183名 (31.9%)	87名 (15.2%)	8名 (1.4%)
楽しい時が多い	119名 (20.8%)	128名 (22.3%)	12名 (2.1%)
楽しくない時が多い	15名 (2.6%)	10名 (1.7%)	4名 (0.7%)

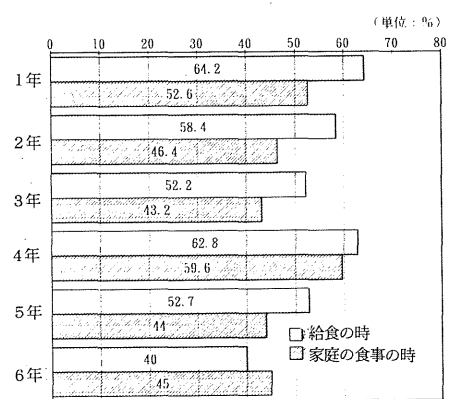


図1 「いつも楽しい」の回答率(学年別)

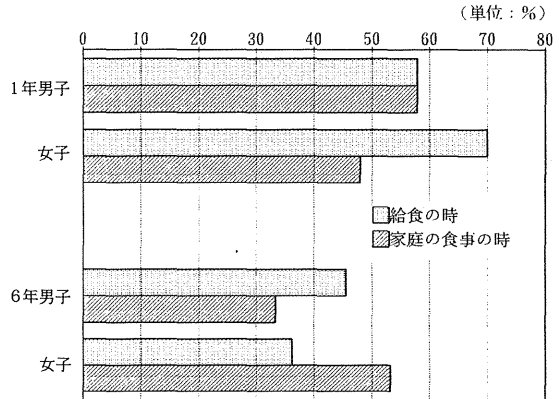


図2 「いつも楽しい」の回答率(男女別)

年生はその率が低くなっていた。前記の筆者らの調査でみた小・中学生の結果<sup>10)</sup>と符合する。

なお、学年別に男女を比較してみると、1年生と6年生に特色が認められた(図2)。1年生は特に女子が給食を楽しいと答えており、家庭の食事と比べても圧倒的に多く給食を楽しみにしている。ところが、同じ女子でも6年生の場合には、逆に給食より家庭の食事の方を楽しいとっている。一方、6年男子は、家庭の食事を楽しいとするより、給食の方が高率である。学年によって、男女差が著しいことが注目される。

## 2) 「楽しい」と感じる理由は何か?

「その食事を楽しいと感じる理由」を選択式で回答してもらったところ、表4の通りであった。給食・家庭の食事でも共通して、その楽しさの理由の1位は「話ができるから」であり、2位は「おいしいものが食べられるから」であった。特に給食の場合は、3位以降の項目との間に選択率に大きな差がみられることより、上記の2項目が給食の楽しさの重要な要素と言えよう。また、家庭の食事の楽しい理由と対比してみると、子どもにとっての給食の位置づけ(家庭の食事とは異なること)が見えてくる。例えば、給食は家庭の食事ほどには「自分の好きなものが食べられる」とか「おなかいっぱい食べられる」状況にはないこと、また「テレビを見ながら」「ゆっくり」食べられるものではないことである。そういう家庭の食事との違い(自分にとって悪い条件)はあったとしても、なお一層「友達と一緒に食べること」と「おいしいものが食べられること」および「給食の

表4 その食事を楽しいと感じる理由 (n = 537) (○内の数値は順位を示す。(以下同))

	給 食	家 庭
友達(給食)／家族(家庭の食事)と話ができるから	① 58.6%	① 61.3%
おいしいものが食べられるから	② 56.5	② 53.1
雰囲気が楽しいから	③ 26.5	⑤ 22.7
自分の好きなものが食べられるから	④ 23.9	③ 45.4
おなかいっぱい食べられるから	⑤ 22.5	④ 35.3
その他	⑥ 2.7	⑥ 4.2

(給食: ① 家で出ない味やメニューがでる(7名) ② 友達を楽しいことをしてくれる(4名)  
家庭: ① テレビを見ながら食べられる(7名) ② ゆっくり食べられるから(6名))

時の楽しい雰囲気」などによって、子ども達は給食の時が楽しいと言っているのである。

なお、「給食がいつも楽しい」と回答していた群の回答を分析してみると、「おいしいものが食べられるから」と「おなかいっぱい食べられるから」を楽しさの理由にあげる率が有意に多くなっていた。身体(おなか)とともに心も満たされている様子が窺える。

表5は、楽しい雰囲気の具体例を自由記述してもらった結果である。家庭の食事に比べ、給食に関する具体例が多く出されていた。表によると、子ども達にとっての「楽しい給食」とは、家族ではない同じ年代の友達と一緒に食べること事態によるようだ。友達と皆で一緒に食事することは、授業の時間からの解放感と生理的な欲求を満たすことが重なって給食の時間を楽しく感じさせているのであろう。学校の給食以外の時間が緊張を伴えば伴うほど、それから解放される時間である給食は、緊張がとけて楽しい雰囲気を感じられるはずである。その前提として、給食の時

表5 楽しい雰囲気の具体例(自由記述回答による)

	給食	家庭
友達と一緒に・家族とは違った雰囲気(給食)/家族と一緒に	① 32名	② 8名
クラス・班が明るい(給食)/皆と笑いあえる/家族が明るい	② 23	④ 7
面白い, 愉快的な話, 自由なおしゃべり	③ 22	① 39
テレビを見ながら食べられる		② 8

間は緊張を伴わない状況にあること, 笑える明るいクラスで, 自由に面白く愉快的話ができる雰囲気を備えていることが不可欠になる。

なお, 学年別に「給食が楽しい」理由の回答を比較してみると, 図3のようになる。「友達とのおしゃべりが楽しいから」は高学年ほど多く, 逆に「おいしいものが食べられるから」は低学年ほど多い回答であった。学年によって, 給食に対してもつ楽しさの理由は異なることがわかる。なお, この学年差は, 家庭の食事に対しては見られず, 給食に対してだけの特徴であった。

低学年の場合は, 友達との関係よりは自分と給食の内容との関係(おいしいかどうか)が重要な意味をもち, 結果としておいしい給食だから楽しいとなっているのであろう。それに対し, 高学年になると給食のなかみよりは, 自分と友達との関係, まさにそのクラスの雰囲気が重視されて

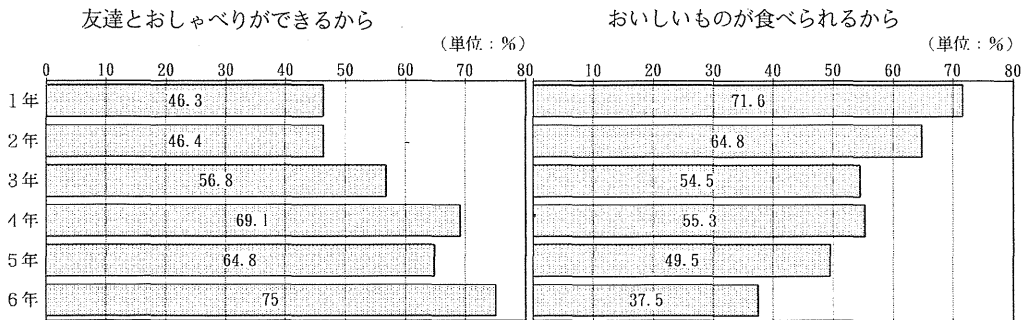


図3 給食が楽しい理由別にみた回答率(学年比較)

いることが特徴的である。

3) 「楽しくない」と感じる理由は?

給食および家庭の食事が楽しくない場合の理由を質問した結果は表6の通りである。

「嫌いなものを食べなければならない」と「ゆっくり食べられない」が『楽しくない給食』の二大理由であった。前述した家庭の食事の楽しい理由の裏返しの結果である。特に「ゆっくり食べられない」ことは家庭の食事には見られない回答であり, 低学年(1・2年生は選択率16.8%)や女子(16.1%)にとっては, かなり影響があるようだ。給食の時間が低学年や女子たちにとって十分に保障されていない実態が浮き彫りにされる。

なお, 楽しくない雰囲気の具体例としては, 給食についてはおしゃべりができないこと(7名)と悪ふざけ・不愉快的な話(5名)が回答された。家庭の場合は, 親に注意されることが群を抜いて多く(15名)みられた。

表6 楽しくないと感じる理由

(n = 573)

	給 食	家 庭
嫌いなものも食べなければならないから	① 20.9%	① 21.8%
ゆっくり食べることができないから	② 14.3	2.1
雰囲気が楽しくないから	③ 4.9	② 8.2
おいしくないから	1.6	③ 2.8
アレルギーなどで食べられないものがあるから	0.5	0.5
その他	2.0	4.7

(給食：都合で全部食べられない。おかわりが無い／悩みごと。叱られた後、友が元気がない)  
(家庭：子どもだけの食事。大人の話に入れない／テレビが見れない／体調悪い・眠い時)

## 4) 食事の時間をもっと楽しくさせる方法は？

「給食がもっと楽しくなるには、どうしたらよいと思いますか」という質問に対する自由記述による回答は、表7の通りである。

全体的には雰囲気作りが圧倒的に多く、特に高学年(24.6%)が給食の雰囲気を大切にしていた。時間のことについては、中・高学年からの要望(意見)が多かった(7.9%)。給食の時間がゆっくり食べられないという不満をもっている者は前述の通り、低学年や女子に多かったことを加味すると、ゆとりある給食を希望する声は全学年にわたると言えよう。

表7 給食をもっと楽しくさせる方法(自由記述の回答例)

① 雰囲気作り (116名)	食器の改良, テーブルクロスを, ビデオ・音楽・クイズの放送グループで, 好きな友達と, 上級生と一緒にランチタイム校庭で, 皆一緒に, 強制的に食べさせない
② 時間のこと (40名)	準備時間からもっと時間をかけたい もっとゆとりをもって
③ メニュー (38名)	バイキング, メニューを選べる デザート(アイス, プリン,ゼリー, ヨーグルト)
④ 好き嫌いへの 対応(12名)	好き嫌いを無くす, 嫌いなものでなければよい

なお、給食が「楽しくない」と感じる子ども群は、「楽しい」と感じる子ども群よりも「給食を楽しくするための改善点」を多く回答していた。その内容は、「自らが、より好き嫌いを無くす」「給食時間以外の時間を充実させて」「時間にゆとりを」「給食の量を考えて」「味付けに工夫を」という内容が目立った。これらの内容は、現時点で給食を楽しく感じていない子ども達にとって「楽しい給食」にしていくための緊急の課題である。「自らが好き嫌いを無くすこと」と書かれていたことは、保護者と話し合いをした結論を回答したことではあるが、子ども側のけなげさを感じさせられる。学校としては、あとの項目について配慮が求められるところである。「味付け」に関しては栄養士・調理員による検討課題であろう。「給食の量」の問題は、単に画一的に「平等」に配膳するのではなく、個人差を配慮することの大切さ(教育の原点)を指摘されたと言えよう。これらはある程度早急に改善できることがらのように思われる。

「時間にゆとりを」という要望は、単に現時点で給食が楽しくない者を救うための姑息的なこと



に終わらせず、前述してきた通り、給食の楽しさに深く関わる要因ということから、抜本的な対策が求められる事項であり重要である。また、「給食時間以外の時間の充実」という意見は、子ども達の生活全体・学校生活や家庭生活全体を見ずえた意見であり、単に給食時間だけの問題にとどめない視点として大事にしたいことである。

#### IV ま と め

今日、子ども達はいつも時間に追われ、あせらされている。そのような一日の生活の中で、多くの子ども達は「給食の時間が楽しい」と言っているのである。子ども達にホッと息を抜き自分に帰れる一時を提供できる場が「食」のときであるが、特に子ども達は家庭の食事とは異なる「給食」を楽しむにしていることがわかった。給食廃止は免れても、今日『学校給食』が抱えている問題はたくさんあり、その一つひとつの問題は即刻解決できるほど簡単なものではない。しかし、さしあたりまずできることとして、子ども達に「楽しい給食」のときを提供することがあげられる。学校生活は授業時間の確保のために給食の時間も切り詰められているのが実情である。しかし、「給食の時間」を子どもの心身を健やかに成長させること(これは教育そのもの)に不可欠であると認識し、子ども達の要望に応じて、給食の時間を積極的に意識的に、もっと「ゆとり」を与えること、および「楽しい雰囲気」を感じさせる工夫をしていくことが緊急に求められている。

#### 注

- 1) 毎日新聞, 1992.9.13 日付
- 2) 学校給食事例編集委員会. 1991. 『学校給食教材化マニュアル』pp.118 - 112. (健康情報研究センター)
- 3) 志方千恵子. 1992. 「『学校給食の廃止宣言』は、おどし?」『消費者レポート』第 839号 . p4. (日本消費者連盟)
- 4) 1958年の学習指導要領の改定時に、学校給食は「学校行事等」の中に位置づけられ、教育活動の一環として「指導」されることになった。その後1968年には、「特別活動」の中の「学級指導」に位置づけられた。
- 5) 新学習指導要領実施にともなう改定で、アレルギーや肥満の問題について注目し、代替食、弁当持参等、柔軟な対応を認めている。カフェテリア方式や郷土料理の採用等も学校に求めている。
- 6) 日本消費者連盟. 1984. 『くらしの手引き. 学校給食 - それは子どもたちに何をもちたか -』
- 7) 大谷尚子・平栗知子. 1990. 「児童生徒の食生活に関する研究 - 楽しい食生活を中心に -」『茨城大学教育学部紀要(人文・社会科学, 芸術)』第 39号 . pp39 - 56.
- 8) 同上
- 9) 謝名元慶福. 1991. 「データにみる子どもの生活と意識」『教育と医学』第 39巻 7号 . pp36 - 40. (慶応通信).
- 10) 前掲7)